

## 韓国語学習者の学習ビリーフに関する一考察

崔 文 姫

### 1. はじめに

本稿は、熊本県立大学における韓国語履修学生の学習ビリーフ (beliefs) について調査し、学生がどのようなビリーフを持って韓国語学習に臨んでいるのかなどの現状を把握することを目的とする。言語学習ビリーフとは、言語 (外国語) はどのように学習すべきか、言語学習はどのようなものであるかといった、言語学習に関しての意見、考え方、信念のことである (片桐 2005)。外国語学習者のビリーフに関する研究では、以下で触れる Horwitz (1987) がよく引用され、Horwitz が用いた beliefs という用語は日本語の論文で言語学習観、信念、信条、確信、意識、ビリーフなどと訳されて使われる。本稿では、「ビリーフ」という用語を用い、熊本県立大学の韓国語学習者が学習に対して持っているビリーフについて調査することにする。

Horwitz (1987) 以降の研究が示唆するように、韓国語学習者のビリーフは韓国語学習に影響を与えると考えられる。学習者が持つ学習ビリーフと教師が予測する (学習者の) 学習ビリーフは必ずしも一致しないだろうから、教師が学生 (=学習者) のビリーフを把握・理解することは、教授法や教材、授業作りなどを考えるうえで重要なものである。また、学生が韓国語学習者として自分自身のビリーフを把握・理解することは、より効果的な韓国語学習を進めるうえで役立つものと考えられる。

Horwitz (1987) の BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) をきっかけに外国語学習者のビリーフに関する調査が盛んになり、現在までに数多くの研究がなされている。BALLI は、Horwitz がアメリカの大学で英語を第二言語 (ESL) として学習する学生を対象に開発したもので、全 35 項目の 5 領域 (Foreign language aptitude 「外国語学習の適性」、The difficulty of language learning 「言語学習の難易度」、The nature of language learning 「言語学習の本質」、Learning and communication strategies 「学習とコミュニケーションのストラテジー」、Motivations 「学習の動機」) で構成される<sup>1</sup>。

1 詳細は佐藤 2006・和田 2007 などを参照されたい。

Horwitz (1987) は BALLI の調査を通して、学習者が語学学習に関してさまざまなビリーフを持っていることや教師と学習者のビリーフが一致しないことがあること、またビリーフが語学学習のストラテジーにも影響を与えていることなどを明らかにした。ビリーフと学習ストラテジーの関係を扱ったものには他にも台湾の大学生の英語学習者を対象にした Yang (1999) の研究があり、加えて、日本の大学生および小中学校の教師を対象に外国語学習のビリーフを調査・比較したもの(稲葉 2014・2015)、日本人大学生のビリーフと英語教育への期待との関係(中山 2010)・韓国語学習に関する好意とビリーフとの関係(齊藤 2009)・英語学習のビリーフ(糸井 2003、佐藤 2006)を調査したものがある。また、日本語学習者のビリーフを調査したもの(坂井 1997・2000、片桐 2005、高崎 2006、和田 2007、阿部 2013)など、BALLI を用いた研究はさまざまな観点から行なわれている。

本稿では、先行研究に倣い、Horwitz (1987) の BALLI を使い、熊本県立大学で筆者が担当するクラスの韓国語学習者のビリーフについて調査・考察を行なう。なお、前述したとおり、BALLI は英語学習者のビリーフを調査することを目的として開発されたものなので、本稿の調査は、BALLI の質問紙項目を韓国語学習者用に修正・加筆し、使用することにする。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査対象者

筆者が 2015 年度に担当している「韓国語入門 B-a<sup>2</sup>」の履修者 19 名と、「韓国語発展 I<sup>3</sup>」の履修者 23 名の合計 42 名を対象に調査(アンケート)を行なった(詳細は表 1 参照)。

だが、本稿の目的は本学の学生のビリーフを知ることなので、調査対象者のうち、公開講座受講生<sup>4</sup>(7名)は今回の分析対象からは除外し、熊本県立大学の学生のみ(35名)を分析・考察することにした。

2 半期 2 コマ(1 コマ 90 分)の授業で、ゼロレベルから始め、韓国語の初級を学習する。主に 1 年生が対象となるが、2~4 年次の学生でも履修は可能である。なお、本クラスにはネイティブスピーカーとして参加している韓国からの交換留学生も 2 名含まれているが、本調査の対象は日本人韓国語学習者であるため、交換留学生は調査から外した。

3 半期 1 コマ(90 分)の授業で、中上級レベルに相当する。1 年次の「韓国語入門 B」および「韓国語基礎」を履修した学生が対象となるため履修者は 2 年生が中心となるが、3~4 年次の学生でも履修は可能である。このクラスにも韓国からの交換留学生が 3 名含まれているが、調査からは除外した。

4 公開講座受講生とは、本学の学生ではなく、「授業公開講座」制度により受講している一般人を指す。公開講座受講生の韓国語学習ビリーフは、学生と異なることが予想されるため、今後人数を増やして調査を行なった上で分析する必要がある。

表 1 調査対象者

	韓国語入門 B-a	韓国語発展 I	合計
1 年次	13 名		13 名
2 年次		18 名	18 名
3 年次	2 名		2 名
4 年次	1 名	1 名	2 名
学生合計	16 名 <sup>5</sup>	19 名 <sup>6</sup>	35 名
	文学部 8 名 (日本語日本文学科 6 名・英語英米文学科 2 名)、総合管理学部 7 名、環境共生学部 1 名	文学部 14 名 (日本語日本文学科 8 名・英語英米文学科 6 名)、総合管理学部 5 名	
公開講座受講生	3 名	4 名	7 名
合計	19 名	23 名	42 名

## 2.2 調査項目 (質問紙) の内容

本調査の項目は合計 50 項目である。Horwitz (1987) の BALLI (35 項目) をもとにして、筆者が本学の学生 (韓国語学習者) に合わせて項目を修正・追加・削除し、5 領域 (「韓国語学習の適性」「韓国語学習の難易度」「韓国語学習の実質 (本質)」「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」「韓国語学習の動機と目標」) に関するピリーフ項目を作成した (計 41 項目)。元の BALLI 項目から 1 項目 (「毎日 1 時間外国語を学習したら、その言語を上手に話せるようになるまでどれぐらい時間がかかると思うか」) を削除し、「韓国語学習の適性」領域に 2 項目 (3・11) と「韓国語学習の動機と目標」領域に 5 項目 (37・39・41・48・50) を追加した。

また、Horwitz の BALLI に加えて、先行研究 (佐藤 2006、和田 2007、阿部 2013) の調査票を参考にし、6 番目の領域である「教師の役割と学習者の自律性」に関するピリーフについても 9 項目を作成した。その理由は次のとおりである。

教育現場において学生の自律性を重視した教育の重要性が叫ばれて久しい現状の中で、学生自身が自分のニーズや希望に役立つよう、自分の学習をコントロールするための能力を持つことが求められる。教師の主導による一方

5 文学部の学生 8 名のうち 7 名 (1 年生) は選択必修科目として、文学部の残りの 1 人 (4 年生) およびその他の学部の学生 (8 名) は選択科目として韓国語を履修している。

6 文学部のうち英語英米文学科の学生 (6 名) は選択必修科目として、日本語日本文学科の学生 (8 名) および総合管理学部の学生 (5 名) は選択科目として韓国語を履修している。

的な授業ではなく、教師は（授業時間外を含めて）学生自身が自律的な学習をスムーズに行えるようにファシリテーター的な役割を担うことが大事であろう。そこで、筆者の担当する授業の学生が韓国語学習の「自律性」に関してどのようなビリーフを持っているのかについて知りたいと思い、本調査の項目内容に加えた。なお、本調査の質問紙には50項目を領域ごとにまとめず、ランダムに並べ替えた。個別の項目内容については3節以下で示す。

### 2.3 調査手順

アンケート調査は、前期最後の授業終了後（7月16日と17日）に、調査の主旨や内容を説明した後教室において実施した。本調査は記名式<sup>7</sup>となるのでそのことも伝え、まずは調査に協力可能かどうかについて尋ね、同意する場合は調査票の表紙<sup>8</sup>に署名をしてもらった。次に、調査項目の回答に移るが、このような調査に不慣れな人がいる可能性もあるので、第1問に関しては筆者が項目内容を読み上げ、回答の仕方（5段階評定尺度の意味も含む）を説明し、筆者の指示のもとで一斉に行なった。第2問からは学生自身のペースに合わせて回答してもらい、順に50問までを行なった。それぞれの項目に関して、回答は5段階評定尺度（否定的な回答←「1（つよく）そう思わない」「2（やや）そう思わない」「3（どちらでもない）」「4（やや）そう思う」「5（つよく）そう思う」→肯定的な回答）を用いている<sup>9</sup>。最後に、調査票の裏側にあるフェイスシートに答えてもらい、調査は終了となる。調査の参加者の回答時間には個人差があるので、調査が終わり次第教室を退室してもよいと指示しておいた。

さらに、質問紙調査の内容にもとづき、調査に協力してくれた学生のうち24名<sup>10</sup>を対象にインタビュー調査を行なった。7月23日から8月5日までにかけて、学生一人ずつインタビューを実施した。主に、すでに行なった質問紙調査の内容について詳しく確認し、既習外国語の学習スタイルやフェイスシートの内容（授業時間外の学習時間・韓国語の接触有無、教科書以外の学

7 記名式にしたのは、個々の学生のビリーフを把握し、学生への個別対応や指導に活かしたいと考えているためである。だが、本稿の分析では全体的な傾向を探ることにとどめ、個別的なケーススタディについては更なる調査・観察をしたうえで別稿に譲る。

8 調査票の表紙には本調査の目的・主旨などが書かれており、下部に署名欄を設けた（同意書を兼ねている）。

9 Horwitz の BALLI では5段階のスケールが「1 強く賛成する～5 強く反対する」となっているが、本調査は、解釈のしやすさを考えて「1」を「5」、「2」を「4」のように順序を逆転させて行なった。つまり、数値が大きいほど肯定（そう思う）の度合いが高いことを意味する。

10 調査に協力してくれた学生は全部で35名だが、インタビューは、ランダムに選んで声をかけたため全員ではない。

習書・教材の有無、韓国語能力試験の受験の有無・予定など<sup>11</sup>について質問した。インタビューは学生が緊張しないよう雑談を混ぜながら行なったため、所要時間は一人当たり30分から1時間程度だった。インタビューの内容は、学生の許可<sup>12</sup>を得て、すべてICレコーダーで録音した<sup>13</sup>。

## 2.4 分析方法

2015年7月16と17日に実施した質問紙調査のデータをもとに、前述した調査項目の6領域(2.2節参照)に従い、分析を行なった。

まず、調査に参加したすべての学生(35名)の平均値と標準偏差を調べた。次に、「韓国語入門 B-a (以下、入門)」の学生(16名)と「韓国語発展 I (以下、発展)」の学生(19名)それぞれの平均値と標準偏差を算出し、2つのクラスを比較するためt検定を行なった。これは、外国語学習者の学習ピリーフは学習歴によって異なるとの指摘があるので(坂井1997)、本学の学生のピリーフに違いがあるのか調べるためである。

また、各項目に対して、学生全員の回答の否定(「1 つよくそう思わない」と「2 ややそう思わない」)・中立(「3 どちらでもない」)・肯定(「4 ややそう思う」と「5 つよくそう思う」)の割合を算出した。

なお、7月23日から8月5日まで行なった学生へのインタビューは、録音内容を聞き直し、分析結果の考察の参考資料として用いることにした。

## 3. 結果

ここからは、50の調査項目を6領域ごとに分けて分析結果を述べる。すべての結果は、質問紙の調査項目に対する回答の「1 つよくそう思わない、2 ややそう思わない、3 どちらでもない、4 ややそう思う、5 つよくそう思う」の1、2、3、4、5をそのまま使い、数値化している。それぞれの項目に対して平均値が5に近づくほど肯定的で、1に近づくほど否定的である(表2～7)。また、図1から図6までは、それぞれの項目の否定派(「1 つよくそう思わない」と「2 ややそう思わない」の合計)の割合、中立派(「3 どちらでもない」)の割合、肯定派(「4 ややそう思う」と「5 つよくそう思う」の合計)の割合を示す。

11 フェイスシートに書かれた内容で、例えば授業時間外の学習時間は学習ピリーフに影響することも予想されるが、そのような研究・分析は今後の課題としたい。

12 インタビューの内容を録音してよいか尋ね、またインタビューで語られた内容を研究発表などで引用することも伝えることを伝え、それについても許可を求めた。幸い、インタビューに応じてくれた学生全員が快く許諾してくれた。

13 のちの、ピリーフデータを分析し、考察を行なう際の参考資料とするためである。

### 3.1 「韓国語学習の適性」領域

まず、「韓国語学習の適性」領域について見てみる。本領域は以下の表2に示されているとおり、11項目から成る。表2<sup>14</sup>には、各項目の平均値および2つのクラスの比較を統計的に検討したものを示し、図1には、各項目に対する全体の回答の否定派・中立派・肯定派の割合を示している。図の横軸の数字は領域の項目番号を表し、縦軸の数字は割合(%)を表している。本節以降の各領域(「韓国語学習の難易度」「韓国語学習の実質」「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」「韓国語学習の動機と目標」「教師の役割と学習者の自律性」)についても同様の方法でデータを提示することにする。

表2から、それぞれの項目に対して、入門クラスと発展クラスの平均点の差はほとんど現れず今回の調査対象者については、学習歴に関わらず概ね同じビリーフの傾向を見せていることが分かる。だが、項目11の「日本人は一般に他の言語よりも韓国語学習が得意である」は、入門クラスと発展クラスにおいて有意差が出ており( $t(29.38)=2.29, p<.05$ )、入門クラスの学生が発展クラスの学生より、日本人は一般に他の言語より韓国語学習が得意であると思っている人が多いと言える。入門クラスは韓国語を学び始めて約半年しか経っていないが、筆者の観察から言えばほとんどの学生が楽しんで勉強しているように見受けられる。そのうえ、ほとんどの学生の韓国語の出来がよく、優秀である。インタビューでも、入門クラスの多くの学生がこれまで学んできた英語(および他の外国語)より韓国語は分りやすく楽しいと述べている。このような自分たちの実体験がもととなり、日本人は韓国語学習が得意であると思っているのだろうか。一方、発展クラスは韓国語を学び始めて約1年半経っているが、筆者の観察からするとできる学生とできない学生がはっきり分かれているように感じる。発展クラスにはこの項目について否定的な回答をしている学生が数名おり、その学生たちの前期の成績を見ると決して優秀とは言い難い。そういう学生はおそらく自分の韓国語学習に苦手意識を持っており、それがこの結果に影響していると考えられそうである。

14 表中の項目番号に網掛けをしているものは、HorwitzのBALLI項目にはなく、本調査で筆者が追加した項目である。以降の表においても同様である。

表2 「韓国語学習の適性」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
2. 外国語を容易に学習できる人がいる	3.51	1.011	3.44	1.094	3.58	.961	0.41
3. 他の人に比べ明らかに韓国語を容易に学習できる人がいる	3.31	.900	3.19	.834	3.42	.961	0.76
4. 外国語ができる人は頭がいい	3.37	1.087	3.38	1.088	3.37	1.116	0.02
5.すでに外国語ができる人は、別の外国語を容易に学習できる	2.91	.919	3.00	.966	2.84	.898	0.50
7.母語を問わず誰でも韓国語ができるようになる	3.20	.933	3.13	.957	3.26	.933	0.43
10.日本人は一般に外国語学習が得意である	2.03	.891	2.13	.957	1.95	.848	0.58
11.日本人は一般に他の言語よりも韓国語学習が得意である	3.60	.881	3.94	.574	3.32	1.003	2.29*
13.理系の人とは文系の人よりも韓国語学習が苦手である	2.43	.979	2.25	1.065	2.58	.902	0.99
19.韓国語学習は男性より女性の方が得意である	2.29	1.274	2.00	1.033	2.53	1.429	1.23
24.韓国語学習は高校生や大学生よりも幼稚園児や小学生のほうが容易である	2.86	.912	2.94	.854	2.79	.976	0.47
38.私は他の人に比べ容易に韓国語学習ができる	2.26	1.067	2.25	1.065	2.26	1.098	0.04

\*p<.05

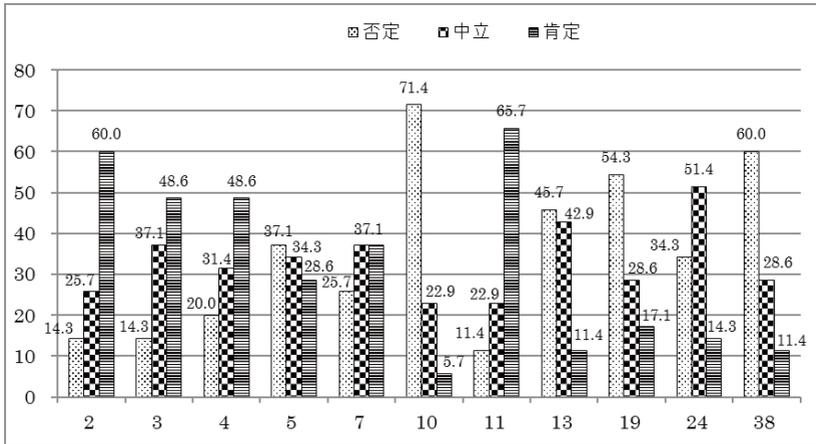


図1 「韓国語学習の適性」の回答の分布 (%)

前述のとおり、統計処理をした結果、項目11を除けば入門クラスと発展クラスの傾向がほとんど同様なので、ここからは表2の学生全員(35名)の平均値を参考にしつつ、図1を中心に結果を述べる。まず、項目2の「外国語を容易に学習できる人がある」は、全体の平均値3.51、否定派14.3%、中立派25.7%、肯定派60%であり、肯定する人の割合が高く過半数を超えている。学生の多くが、外国語を容易に学習できる人が確実にいると考えていることが分かる。

項目3の「他の人に比べ明らかに韓国語を容易に学習できる人がある」についても多くの学生がそう感じている(M = 3.31)と言えよう。この項目は否定派14.3%、中立派37.1%、肯定派48.6%であり、この項目に関しても過半数近くの人が肯定している。一方、項目38を見ると、自分自身は他の人に比べ容易に韓国語学習ができるとは思っていないようである(M = 2.26)。この項目の肯定派は11.4%、反対に否定派は60%で、否定する人の割合が断然高い。インタビューの中でも、「テストなどで良い点を取るため、また授業中にしっかり作文ができるようそれなりに時間をかけて勉強しているので、そういう意味では容易とは思えない」「暗記や小テストのために随分時間を使って勉強している。決して容易ではない」「自分はすごい時間をかけて勉強しているのに、周りには簡単に点を取っている人もいるので...、やはり自分は韓国語を容易に学習しているとは言えない」などの意見が聞かれた。それらの意識がこの項目の結果に反映されたと考えられる。

また、学生の多くが、日本人は一般に外国語学習が得意であるとは思っておらず（項目 10、 $M = 2.03$ 、否定派 71.4%、中立派 22.9%、肯定派 5.7%）、本領域の中で最も否定派の割合が高い。その反面、日本人は他の言語よりも韓国語学習は得意であると思っている学生が 6 割を超えており（項目 11、 $M = 3.60$ 、否定派 11.4%、中立派 22.9%、肯定派 65.7%）、この項目は本領域の中でも肯定派が一番多い結果となった。さらに、項目 7 ( $M = 3.20$ ) では、母語を問わず誰でも韓国語ができるようになると思っている人（肯定派）の割合とどちらでもないと考えている人（中立派）の割合がともに 37.1%、誰でも韓国語ができるとは思っていない人（否定派）の割合が 25.7% であり、さまざまな考え方を持っていることが分かった。学生は、多くの日本人が一般に外国語学習が苦手であるが、韓国語学習は得意であると考えている。次節で見るように、学生は韓国語が母語である日本語と類似していると認識しており（表 3 および図 2 の項目 9）、このことが韓国語学習が得意であるという判断と関係していると考えられる。また、この認識が項目 7 の結果にも影響していると思われる。

項目 4 の「外国語ができる人は頭がいい」は、否定派 20%、中立派 31.4%、肯定派 48.6% であり ( $M = 3.37$ )、外国語ができる人は頭がいいと考えている傾向にある。項目 5 の「すでに外国語ができる人は、別の外国語を容易に学習できる」については否定派 37.1%、中立派 34.3%、肯定派 28.6% を示し ( $M = 2.91$ )、やや否定派が上回っている。すでにできる外国語があっても別の外国語を容易に学習できるかということ、そうとは考えない人とそう考える人、どちらでもないと考ええる人に分かれ、さまざまな考え方を持っている学生が存在する。

項目 13 の「理系の人とは文系の人よりも韓国語学習が苦手である」という問いについては、否定派 45.7%、中立派 42.9%、肯定派 11.4%、平均値 2.43 である。理系の人とは文系の人より韓国語学習が得意でないと考ええる人は 1 割程度しかおらず、理系であろうが文系であろうが関係ないと考えている人は 4 割を超え、理系の人の方が文系の人より得意であると思っている人も 5 割近くいることが分かる。今回の分析対象者（＝韓国語履修者の学生）はほとんど文系の人で構成されており（表 1 参照）、比較対象となる理系の人々の韓国語学習者に接することがないため、それが結果に反映されたのかもしれない。

最後に、韓国語学習と性差の関係についての項目（19）および韓国語学習と年齢との関係についての項目（24）について見ると、両方とも平均値が低い（それぞれ、 $2.29 \cdot 2.86$ ）。項目 19 の「韓国語学習は男性より女性の方が得意である」の否定派が 54.3% で 5 割を超えており、項目 24 の「韓国語学習は高校生や大学生よりも幼稚園児や小学生のほうが容易である」の中立派

が51.4%でこれも5割を超えている。第二言語習得と性差の関係においては、女性が男性より優れているという諸説があるが、今回の韓国語学習者に対する調査では、必ずしも女性が男性より得意であるとは考えていないことが明らかになった。今回の分析対象者(=学生)はほとんど女性であり(男性は35名中2名のみ)、比較対象となる男性の韓国語学習者に接することがないため、それが結果に反映している可能性がある。また、第二言語習得と年齢の関係においては、臨界期仮説などが示唆するように、大人より子供のほうが優れていると言われている。だが、本調査では、中立派(どちらでもない)が過半数を、否定する人の割合が3割を超えており、子供<sup>15</sup>のほうが韓国語学習の適性が高いとは思っていないことが分かった(肯定派14.3%)。この結果は、(英語とは違って)韓国語に関しては、早期教育を受けなくても、すなわち、いつ学習を始めても上達できると思っている学生が多いことの現れであり、教師として心強く感じる。

### 3.2 「韓国語学習の難易度」領域

次に、「韓国語学習の難易度」領域の結果を示す。この領域は表3の6つの項目で構成される。ここでも、すべての項目に対して入門クラスと発展クラスの差がほとんど現れず、今回の調査対象者は、「韓国語学習の難易度」領域に対し、学習歴に関わらず概ね同じ傾向を見せていることが分かる(表3参照)。だが、そのうち有意差のある項目が1つ存在し<sup>16</sup>、項目9(「韓国語は日本語と文法体系などが似ている」)がそれに該当する( $t(29.64)=2.08, p<.05$ )。この項目に関しては全体の平均値がとて高く( $M=4.60$ )、ほとんどの学生が「韓国語は日本語と文法体系が似ている」と考えていることが分かる。特に、入門クラスの学生( $M=4.81$ )が発展クラスの学生( $M=4.42$ )よりもそう思っていることが明らかになった。一般的に、日本語と韓国語の類似点(語順が同じで文法体系が似ている点など)はよく知られており、インタビューでも、韓国語を学習する前からそのような認識を持っていた学生がいることや学習を進めて行くうちに日本語と韓国語の共通性に気付く学生がいることを再認識した。

15 本稿は、本学の調査対象者に合わせ、子供を「幼稚園児や小学生」とし、大人を「高校生や大学生」とし、調査を行なった。

16 加えて、項目29は有意差はないが「有意な傾向にある」と言えよう( $t(33)=1.81, p<.10$ )。

表3 「韓国語学習の難易度」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 学習が容易な外国語とそうでない外国語がある	3.91	.853	3.94	1.063	3.89	.658	0.15
8. 一般に、韓国語学習は他の外国語学習よりも難しい	2.23	.770	2.19	.750	2.26	.806	0.29
9. 韓国語は日本語と文法体系などが似ている	4.60	.604	4.81	.403	4.42	.692	2.08*
14. 韓国語は、話す・聞くよりも読む・書くほうが容易である	3.00	1.000	3.19	.911	2.84	1.068	1.02
15. 韓国語は、聞くよりも話すほうが容易である	3.17	.857	3.38	.500	3.00	1.054	1.38
29. 私は韓国語が上手になると思う	3.49	.818	3.75	.856	3.26	.733	1.81

\*p<.05

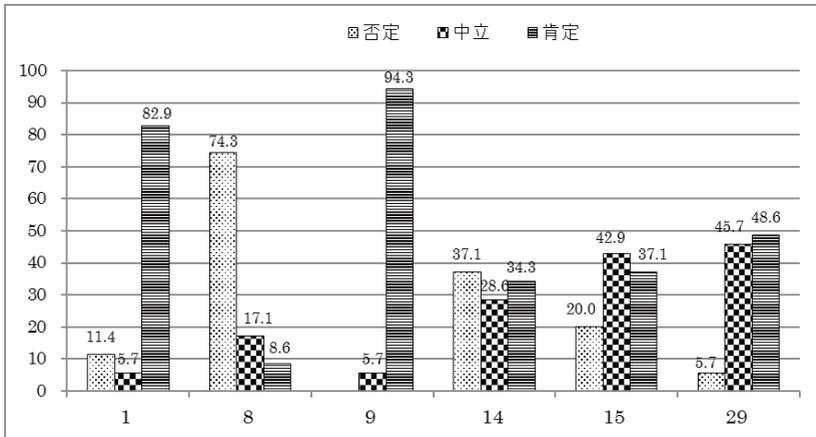


図2 「韓国語学習の難易度」の回答の分布 (%)

図2を見ると、この領域で肯定派が一番多いのは前述した項目9であることが分かる。肯定派が94.3%、中立派が5.7%を示し、否定する人は1人もいなかった。よって、ほとんどの学生が、韓国語は日本語と文法体系が似ていると認識しており、それを裏付けるように、項目8の「一般に、韓国語学習は他の外国語学習よりも難しい」の否定派が74.3%を示している (M =

2.23)。この結果は、多くの学生が韓国語は日本語と似ている部分が多いため他の外国語より学習しやすいと考えていることを示している。また、多くの学生が「学習が容易な外国語とそうでない外国語がある」と考えており（項目1、 $M = 3.91$ 、肯定派82.9%）、圧倒的に難易度に差があると認識している人の割合が高い。

加えて、インタビューの中でも、韓国語のように日本語と文法や語順などが同じである言語は学習が容易であり、英語のように語順などが異なる外国語は学習が容易ではないと述べていた学生が多数いた<sup>17</sup>。さらに、項目29の「私は韓国語が上手になると思う」については、否定派5.7%、中立派45.7%、肯定派48.6%であり、学生の半分ぐらいが自分自身の韓国語が上手になると考えており、どちらでもないと考えている人も4割を超えている。否定する人の割合が非常に低いことから、概ね、今回対象にした学生は韓国語の上達度への期待を持っていると言えよう。

項目14の「韓国語は、話す・聞くよりも読む・書くほうが容易である」は、否定派37.1%、中立派28.6%、肯定派34.3%であり（ $M = 3.00$ ）、否定派と肯定派の差がほとんどなく中立派は3割近くおり、3つに分散していることが分かる。よって、今回の調査対象者は、韓国語の4技能（話す・聞く・読む・書く）に関する言語スキルについて、得意・不得意の分野の個人差が大きいと考えられる。また、項目15の「韓国語は、聞くよりも話すほうが容易である」は否定派20%、中立派42.9%、肯定派37.1%であり（ $M = 3.17$ ）、肯定派の割合が否定派を超えている。ここから分かるのは、韓国語の話す能力と聞く能力だけを考えた場合は話すほうが容易であると認識している人が多いことである。加えて、統計的に有意差は見られなかったが、項目14と項目15については、発展クラスに比べ入門クラスの方が両方とも平均値が高く（ $3.19 > 2.84$ 、 $3.38 > 3.00$ ）、入門クラスの学生が話す・聞くよりは読み書きのほうが容易であると考えており、話す能力と聞く能力だけを考えた場合は話すほうが容易であると認識していることが分かった。3.1節で述べたとおり、入門クラスは学習し始めて半年しか経っておらず、授業内容も前半は文字学習に集中していたため、項目14の結果については当然かもしれない。項目15については、学生のインタビュー内容から次のようなことが言える。入門クラスでは毎回会話文を暗記させ、学生同士でペアを組みクラス全員の前で発表させる練習を行なっているが、「聞くのは自信ないけど、学

17 ただ、今回のインタビューの対象者のうち一人の学生（入門クラス、1年生）は、自分は英語が好きでずっと勉強しているので、今の自分にとっては英語学習が容易であり、韓国語や中国語など他の外国語の学習は用意でないと語っていた。

んだ文型を暗記して練習することで韓国語が話せていると思ってしまう」「しょっちゅう教科書の会話文などを口ずさんでいるので、教科書の会話文についてはなんとなく言えている気がする」などの意見が寄せられた。学生のそうした意識が結果に反映されていると考えられる<sup>18</sup>。

### 3.3 「韓国語学習の実質」領域

「韓国語学習の実質」領域は表4の6項目で構成される。この領域においても、すべての項目に対して入門クラスと発展クラスの差はほとんどなく、今回の調査対象者については学習歴に関わらず概ね同じ傾向を見せている(表4参照)。

各項目の全体の平均値および肯定派の割合を見ると、項目16の「韓国語をマスターするためには韓国の文化も知る必要がある」の平均値(4.29)および肯定派の割合(97.1%)が一番高く、項目12の「韓国語学習は、言語学習以外の勉強とは異なる」の平均値(2.43)および肯定派(11.4%)の割合が一番低い。ほとんどの学生が、韓国語をマスターするためには韓国文化に関する知識が必要であると強く思っており、項目12の否定派が54.3%、中立派が34.3%であることから韓国語学習と言語学習以外の勉強は似ていると考えている人が多いと言ってよい。インタビューの中でも、数名の学生が、韓国語学習も他の文学や歴史などの勉強方法と変わらず、また時間をかけて予習・復習をすることが大事であると述べていた。

項目6の「韓国語は韓国にある教育機関で学習するのが最もよい」は、否定派34.3%、中立派25.7%、肯定派40%であり、肯定派が若干多い。インタビューでも学生が述べていたが、韓国は日本に近く日本国内でも韓国人のネイティブスピーカーの先生に習うことができ、韓国文化などにも接する機会が多いため、わざわざ韓国に行って勉強しなくても十分上達できると思う学生がかなりいるようである。英語学習者などを対象にした先行研究のほとんどは、外国語はその言語が話されている国や地域で学習するのが一番良いとの結果を高い確率で示しているが、日本にいる韓国語学習者を対象にした本稿の調査結果は若干異なるものになった。

本領域の中には、韓国語学習で優先すべき項目について3つ挙げているが、

18 項目15について、インタビューを受けた発展クラスの学生のうち2人は、逆の意見を表明している。「聞くのはある程度できるけど、話すのは自分が言いたいことがすぐ出て来ないのでまだ自信がない」「最近韓国ドラマなどもなるべく字幕なしで見ようとしているが、以前に比べれば大分聞き取れるようになった」が「話すのは普段授業以外の時間に韓国語を使うことがほとんどないので…難しい」と述べていた。入門クラスと発展クラスの学生の意識の差については非常に興味深いので今後の課題としたい。

結果は「文法規則」(項目22)、「新しい単語」(項目21)、「日本語の表現を韓国語に置き換える」(項目23)の順に平均値および肯定派の割合が高い(順に  $M = 3.63 \cdot 3.43 \cdot 3.09$ 、肯定派 = 62.9%・60%・31.4%)。韓国語のスキルを延ばすためには、文法規則をできるだけ覚えることが重要であると考えられる学生が一番多く、次にボキャブラリーを覚えることが重要だと考えている学生が多いことが分かった。特に、ボキャブラリーについては、入門クラス ( $M = 3.06$ ) よりも発展クラス ( $M = 3.74$ ) の平均値が高く、発展クラスの学生ほど語彙を暗記することの重要性を認識していると言えよう。実際、インタビューにおいても「単語を覚えてないからすぐに作文ができなくて常にもどかしい思いをしている」と述べた学生がいた。最後に、日本語の表現を韓国語に置き換える、翻訳の手法を取ることの重要性を認識している結果となった。ただ、この項目23については、肯定派(31.4%)よりも中立派(42.9%)が多く、韓国語学習における翻訳のような学習方法はそれを支持する人とそうでない人に分かれる。

表4 「韓国語学習の実質」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
6. 韓国語は韓国にある教育機関で学習するのが最もよい	3.11	1.051	3.31	1.138	2.95	.970	1.03
12. 韓国語学習は、言語学習以外の勉強とは異なる	2.43	.979	2.56	1.153	2.32	.820	0.74
16. 韓国語をマスターするためには韓国の文化も知る必要がある	4.29	.750	4.31	1.014	4.26	.452	0.19
21. 韓国語学習で優先すべきは、新しい単語をできるだけ覚えることである	3.43	1.037	3.06	1.063	3.74	.933	2.00
22. 韓国語学習で優先すべきは、文法規則をできるだけ覚えることである	3.63	.973	3.44	1.209	3.79	.713	1.02
23. 韓国語学習で優先すべきは、日本語の表現を韓国語に置き換えることである	3.09	.818	3.06	.854	3.11	.809	0.15

19 この項目は有意差があるとまでは言えないが、有意な傾向にあるとは言える ( $t(33)=2.00$ ,  $p<.10$ )。

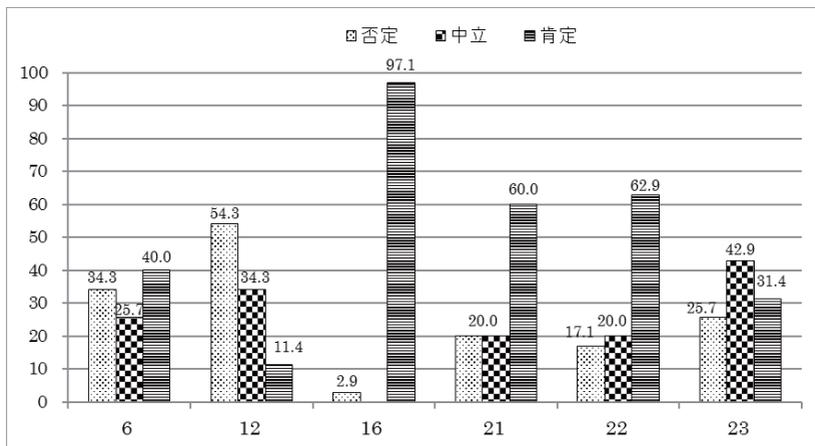


図3 「韓国語学習の実質」の回答の分布 (%)

### 3.4 「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」領域

「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」領域は表5の9項目で構成される。すべての項目に対して、入門クラスと発展クラスの差は現れておらず、今回の調査対象者は、本領域についても学習歴に関わらず概ね同じ傾向を見せていることが分かる（表5参照）。

全体のデータを見ると、2項目（項目17と18）<sup>20</sup>を除き、すべて高い平均値が示されている。つまり、学生は、韓国語学習とコミュニケーションのストラテジーに関して高いピリーフを持っていると言える。特に、項目27の「韓国語を何度も繰り返し練習するのは重要である」は、肯定派が100%、平均値が4.71であり、学生全員が繰り返し学習することの重要性を認識していることが明らかになった<sup>21</sup>。

齊藤（2009）は、韓国語学習への好意度<sup>22</sup>が高いグループと低いグループのピリーフの差を調べているが、反復練習の重要性に対して、好意度の低い

20 この2項目は質問項目への回答を逆の意味で考えなければならない逆転項目であるため、回答の解釈が他の項目とは異なる。

21 この結果は、前述の項目12の結果（3.3節参照）と合わせて考えると、今回対象としている学生は、韓国語（外国語）学習を他の授業の勉強と変わらない方法で行っており、外国語以外の学習でも常に反復練習のような学習習慣を持っていることの現れであろう。

22 「韓国語の勉強ができることが嬉しい」「韓国語の勉強は他の科目の勉強よりも楽しい」「韓国語を勉強することが好きだ」「韓国語の勉強することは苦痛だ」「韓国語の勉強することはストレスがたまる」の5項目をもとに調査されている。

グループ (M = 4.63) より高いグループ (M = 4.96) のほうがより強く認識していることを明らかにしている。なお、好意度の低いグループでも反復練習の重要性に対して非常に高い平均値 (4.63) を示している。齊藤の研究および本稿の調査結果から考えると、(日本人の) 韓国語学習者は、ほとんど反復練習が重要であると強く認識していると言えそうである。

また、音声教材などを使って練習すること (項目 20、M = 4.43、肯定派 88.6%)、韓国語らしい発音で話すこと (項目 26、M = 4.23、肯定派 94.3%) の重要性を認識しており、知らない韓国語の単語の意味を推測してよく (項目 28、M = 4.34、肯定派 94.3%)、韓国語の誤りは初期段階で直したほうがよい (項目 25、M = 4.14、肯定派 88.6%) とも考えている。これらの項目の肯定派の割合はすべて 9 割近くあり、学生の多くが高いビリーフを持っていることが判明した。

加えて、項目 17 の「間違えずに言えるまでは韓国語を話すべきではない」は、否定派が 88.6%、肯定派が 2.9% であり、9 割近くの学生が、韓国語を正しく言えなくても話した方がよいと考えていることが分かる。また、項目 18 の「日本人学習者同士で韓国語の会話練習をするのは無意味である」は、否定派が 97.1% を示しており、ほとんどの学生が、ネイティブスピーカーとの会話練習を必ず望んでいるわけではなく、日本人学習者同士の会話練習も意味があると考えていることが分かった。つまり、自分自身が韓国語を使うこと自体が大事であると考えている。

項目 45 の「授業以外に韓国語を使う機会があれば参加したい」および項目 30 の「私は人前で韓国語を話すとき、緊張したり恥ずかしくなったりする」は、それぞれの否定派が 2.9%・17.1%、中立派が 22.9%・17.1%、肯定派が 74.3%・65.7%、平均値が 4.06・3.43 である。学生の大半が授業以外に韓国語を使う機会があれば参加したいと積極性を見せているのにも関わらず、人前で韓国語を話すとき緊張したり恥ずかしくなったりする人も多いことが分かる。後者の項目 30 については、インタビューの中で学生に確認した結果、韓国語だからというよりは日本語であっても人前で話すことに緊張や恥ずかしさを感じる人が多く、その学生たちの回答がこの項目の内容に肯定的であることが判明した。(韓国語に限らず) 人前で話をするのが得意な人と不得意な人がいることから、教育現場では学生を強制的に人前で話させる時にはこうした違いにも注意を払う必要があろう。

表5 「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
17. 間違えずに言えるまでは韓国語を話すべきではない	1.46	.780	1.38	.719	1.53	.841	0.57
18. 日本人学習者同士で韓国語の会話練習をするのは無意味である	1.43	.558	1.31	.602	1.53	.513	1.14
20. 韓国語を音声教材などを使って練習することは重要である	4.43	.884	4.19	1.109	4.63	.597	1.51
25. 学習の初期段階で韓国語の誤りを直さないと、後になって直すのが難くなる	4.14	.692	4.19	.544	4.11	.809	0.35
26. 韓国語を韓国語らしい発音で話すことは重要である	4.23	.646	4.38	.500	4.11	.737	1.24
27. 韓国語を何度も繰り返し練習するのは重要である	4.71	.458	4.75	.447	4.68	.478	0.42
28. 知らない韓国語の単語があった場合、その意味を推測することはよいことである	4.34	.591	4.38	.619	4.32	.582	0.29
30. 私は人前で韓国語を話すと、緊張したり恥ずかしくなったりする	3.43	.917	3.31	1.078	3.53	.772	0.68
45. 授業以外に韓国語を使う機会があれば参加したい	4.06	.838	4.19	.834	3.95	.848	0.84

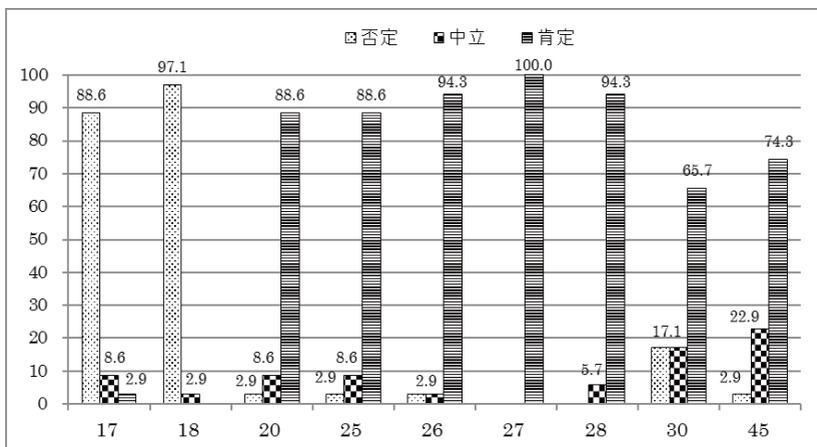


図4 「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」の回答の分布 (%)

### 3.5 「韓国語学習の動機と目標」領域

「韓国語学習の動機と目標」に関する領域は表6の9項目で構成される。この領域においても入門クラスと発展クラスの差がほとんどないので、全体のデータを中心にみることにする。表6から分かるのは、項目46、43、50、32、41、35の順に平均値が高く、項目37、39、48の平均値は低いことである。また、図5から、肯定派の割合は項目46、43、32 = 35、50、41の順に高く、否定派の割合は項目37、39、48の順に高いことが分かる。

ほとんどの学生が、韓国語学習の動機として、韓国語がうまくなれば韓国語を使う機会が増え（項目46、 $M=4.34$ 、肯定派91.4%）、将来の仕事の幅も広がると考えている（項目43、 $M = 4.17$ 、肯定派85.7%）ことが明らかになった。また、韓国語ができることは学生自身にとって重要で（項目32、 $M = 3.97$ 、肯定派80%）、韓国のドラマ・映画・K-POPなどに興味を持っており（項目41、 $M = 3.89$ 、肯定派71.4%）、韓国および韓国人をよく知るため（項目35、 $M = 3.86$ 、肯定派80%）、韓国語を学習することが分かった。

さらに、韓国に行って韓国語を使ってみたいから韓国語を学習している人も多い（項目50、 $M = 4.00$ 、肯定派74.3%）が、一方、韓国への留学（短期も含む）を考えている人は少ない（項目48、 $M = 2.94$ 、肯定派34.3%）。項目48については、むしろ否定派が5割近く（45.7%）おり、肯定派を上回る。全体の傾向としては、韓国語を勉強しているが韓国への留学までは考えていない。この項目においては、統計的に有意な差は見られなかったが、入門クラス（ $M = 2.75$ ）より発展クラス（ $M = 3.11$ ）の中に留学を考えている学生が若干多いことが結果として現れた。また、インタビューの中でも発展クラスの学生数名<sup>23</sup>が、韓国留学を考えているため1年生に続いて発展クラスを履修していると語っていた。また、留学までは考えていないが韓国旅行に行つて学んだ韓国語を試してみたいという人は多く存在した<sup>24</sup>。

項目37の「他の人に勧められて韓国語を学習している」や項目39の「周りで韓国語を使っている人がいるので学習している」については両方とも平均値が低く（順に、 $1.69 \cdot 2.06$ ）、それぞれの否定派は82.9%と71.4%で、肯定派を大きく上回っている。今回の調査対象者は、誰かに勧められて韓国語を履修したり、自分の周りに韓国語を使っている人がいるから韓国語を履修しているわけではないことを意味する。

23 選択科目として韓国語を履修している総合管理学部の学生がほとんどである。

24 このピリーフは、入門および発展クラスの学生の多くが持っているようである。

表6 「韓国語学習の動機と目標」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
32. 韓国語ができることは自分にとって重要である	3.97	.785	4.00	.632	3.95	.911	0.20
35. 韓国語を学習するのは、韓国および韓国人をよく知るためである	3.86	.879	3.88	.957	3.84	.834	0.11
37. 他の人に勧められて韓国語を学習している	1.69	.832	1.69	.793	1.68	.885	0.01
39. 周りで韓国語を使っている人がいるので学習している	2.06	1.162	2.25	1.390	1.89	.937	0.90
41. 韓国のドラマや映画、K-POPなどに興味を持っている	3.89	1.451	3.75	1.390	4.00	1.528	0.50
43. 韓国語ができれば将来の仕事の幅が広がる	4.17	.747	4.25	.775	4.11	.737	0.57
46. 韓国語がうまくなれば韓国語を使う機会が増える	4.34	.725	4.44	.727	4.26	.733	0.70
48. 韓国への留学（短期も含む）を考えている	2.94	1.305	2.75	1.390	3.11	1.243	0.80
50. 韓国に行って韓国語を使ってみたいので学習している	4.00	1.029	3.88	1.258	4.11	.809	0.63

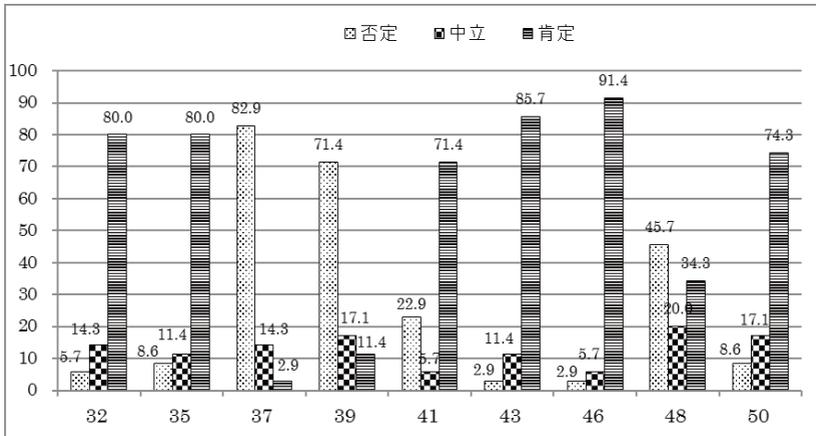


図5 「韓国語学習の動機と目標」の回答の分布 (%)

### 3.6 「教師の役割と学習者の自律性」領域

最後に、「教師の役割と学習者の自律性」領域について見る。この領域は表7の9項目で構成される。この領域もすべての項目において入門クラスと発展クラスの差がほとんど見られない。

全体のデータを通してみると、すべての項目において、平均値が3点以上、肯定派の割合も項目34(37.1%)以外は5割を超えている(51.4%~85.7%)。このことから、学生の先生に対する依存度・期待度が高いことがうかがえる。特に、本領域の中で平均値および肯定派の割合が一番高いのは項目47の「先生が出す小テストなどの定期的な試験は自分にとって助けになる」であり、平均値4.37、肯定派85.7%を示している。また、統計的には有意な差はないが<sup>25</sup>、入門クラスの平均値は4.63、発展クラスの平均値は4.16であり、発展クラスに比べ入門クラスの学生のほうが、小テストなどの定期試験が自分の学習に役に立つと考えているようである。筆者の担当するクラスでは前期の授業期間中、それぞれ5回の小テストを実施したが、インタビューの中で多くの学生が、定期的に小テストがあるから常に勉強しなければならず、それが韓国語の上達につながっていると述べていたことは印象的だった。学生のそうした認識がこの項目の結果に反映されていると考えられる。

25 有意差はないが、有意な傾向にはあると言えよう ( $t(33)=1.76, p<.10$ )。

表7 「教師の役割と学習者の自律性」に関するピリーフ項目の平均値

項目内容	全体 (n=35)		入門 (n=16)		発展 (n=19)		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
31. 先生の言う通りに勉強すれば韓国語ができるようになるのが望ましい	3.86	.692	3.75	.683	3.95	.705	0.84
33. 韓国語学習には常によい先生からの指導が必要である	3.97	.785	4.19	.750	3.79	.787	1.52
34. 先生には、普通の予習・復習以外に宿題を出してもらい韓国語をより勉強できるようにしてほしい	3.37	.942	3.44	.814	3.32	1.057	0.38
36. 先生には、韓国語をどのように勉強すればよいか、教材の使い方などをこと細かく教えてほしい	3.40	.946	3.19	.981	3.58	.902	1.23
40. 先生には、個人レベルで自分の韓国語の間違いなどを直してほしい	3.69	.676	3.63	.619	3.74	.733	0.48
42. 自分の韓国語学習のどの部分を改善するべきかわかっている	3.14	1.061	2.81	1.109	3.42	.961	1.74
44. 先生には、自分の韓国語がどのぐらいのレベルに達したか教えてほしい	3.49	1.011	3.44	1.094	3.53	.964	0.26
47. 先生が出す小テストなどの定期的な試験は自分にとって助けになる	4.37	.808	4.63	.719	4.16	.834	1.76
49. 自分の間違いを自分でチェックし、勉強することができる	3.34	1.136	3.31	1.302	3.37	1.012	0.14

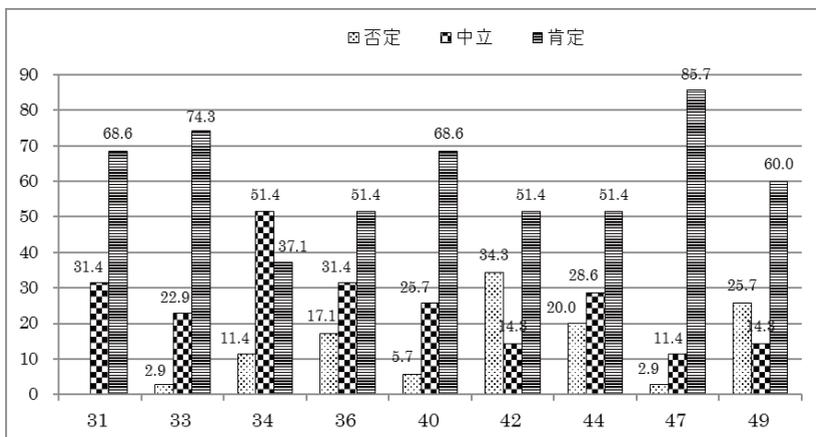


図6 「教師の役割と学習者の自律性」の回答の分布 (%)

次に、項目33（「韓国語学習には常によい先生からの指導が必要である」）の平均値（3.97）および肯定派（74.3%）の割合が高いことが示されている。多くの学生が、常によい先生からの指導を必要としている。また、先生の言うとおりに勉強すれば韓国語ができるようになるのが望ましいと考えており（項目31、 $M = 3.86$ 、肯定派 68.6%）、先生には個人レベルで自分の間違いを直してほしい（項目40、 $M = 3.69$ 、肯定派 68.6%）、勉強の仕方をこと細かく教えてほしい（項目36、 $M = 3.40$ 、肯定派 51.4%）、自分のレベルがどの程度なのか教えてほしい（項目44、 $M = 3.49$ 、肯定派 51.4%）と考えていることが明らかになった。これらの項目はすべて肯定派が過半数を超えており、学生の教師への依存度もしくは教師への信頼度が高いと解釈できる。また、項目34の「先生には、普通の予習・復習以外に宿題を出してもらい韓国語をより勉強できるようにしてほしい」は、平均値 3.37、否定派 11.4%、中立派 51.4%、肯定派 37.1%であり、肯定派が否定派を超えてはいるがそれよりも「どちらでもない」と考えている人の割合が過半数以上である。ここから分かるのは、宿題を出してほしいと思う学生と出してほしくないと思う学生が同時に存在することである。

さらに、韓国語学習において自分自身のどの部分を改善すべきか分かっていない学生が5割を超えており（項目42、 $M = 3.14$ 、肯定派 51.4%）<sup>26</sup>、自分の間違いを自分でチェックし、勉強することができると考えている学生も6割に達している（項目49、 $M=3.34$ 、肯定派 60%）。前述のとおり、学生の教師への依存度・期待度は高い傾向にあるが、学生自身が学習に関する改善方法を分かっており、誤りなどを自らチェックし勉強できる人が6割近くいることも事実である<sup>27</sup>。

#### 4. まとめ

本稿は、筆者の担当する「韓国語入門 B-a」および「韓国語発展 I」の学生が韓国語学習についてどのようなビリーフを持っているのか調査したものである。まず、韓国語学習のビリーフについて入門クラスと発展クラスの2

26 この項目の入門クラスと発展クラスの差を見ると、発展クラス（ $M = 3.42$ ）が入門クラス（ $M = 2.81$ ）より平均値が高く、入門クラスに比べ発展クラスの学生のほうが、自分自身の韓国語学習のどの部分を改善すべきか分かっていないと考えられる（統計的に有意差はないが、有意な傾向にはある（ $t(33)=1.74, p<.10$ ））。

27 逆に、4割近くの学生はできないと解釈できる。詳しく述べると、自分自身の学習に関する改善方法を分かっていない学生（否定派）が34.3%、誤りなどを自分でチェックし勉強することができない学生（否定派）が25.7%存在している（中立派は両方とも14.3%存在する）。教育現場では、こうした自律性や主体性に欠けている（と思っている）学生の存在にも注意を払いながら指導を行う必要があるだろう。

グループ間の差をt検定によって分析し、調査項目（計50項目）のうち2項目のみに5%水準で有意差があることを確認した。調査項目の6領域（「韓国語学習の適性」「韓国語学習の難易度」「韓国語学習の実質」「韓国語学習とコミュニケーションのストラテジー」「韓国語学習の動機と目標」「教師の役割と学習者の自律性」）のうち、「韓国語学習の適性」領域の1項目（項目11「日本人は一般に他の言語よりも韓国語学習が得意である」）と「韓国語学習の難易度」領域の1項目（項目9「韓国語は日本語と文法体系などが似ている」）にのみ、学習ピリーフと学習歴との関連が認められた。主に2年生が中心となる発展クラスに比べ、1年生が中心となる入門クラスの学生のほうが、韓国語は日本語と似ているので学習しやすく、他の言語よりも韓国語学習が得意であると認識していることが明らかになった。その他の領域（の項目）では、2グループ間に有意差が見られなかったため<sup>28</sup>、今回対象にしている学生の学習ピリーフは学習歴との関連が薄く、概ね同様の学習ピリーフを持っていると結論付けられる。

続いて、本調査の結果得られた熊本県立大学の韓国語学習者の学習ピリーフの全体傾向について記しておく。

- (1) 韓国語学習とコミュニケーションのストラテジーに関して高いピリーフを持っており、特に、反復練習や音声教材などを使った発音練習、韓国語らしい発音で話すことなどの重要性を認識している。
- (2) 外国語学習に関して苦手意識を持っている日本人でも韓国語は容易に学習できると考えているが、自分自身の韓国語学習については容易であると考える学生の割合は5割程度しかない。
- (3) 韓国語と日本語は語順や文法体系などが似ており最も学習しやすい外国語であると認識していて、学習においても優先すべき項目は第一に文法で、次が語彙を覚えることであると考えている。
- (4) 学習において教師への依存の傾向が強く、教師とその教授法などに対して信頼と期待を寄せている。言い換えると、学生自身の自律性は低いことがうかがえる。特に、教師による小テストなどの定期試験が学習の一助になると考えている。
- (5) 韓国語を学ぶ動機として将来への期待が見受けられ、韓国語の上達は将来の仕事につながり、韓国語を使う機会も増えると考えている。
- (6) 韓国文化学習が韓国語学習の一助になると考えている。また、韓国や韓国人のことを知るため韓国語を学んでおり、K-POPや韓国ドラマなどに

28 すでに述べたとおり、有意傾向にあると言える項目は4つ存在する。

も興味を持っている。

(7) 韓国語の4技能(話す・聞く・読む・書く)について、学生自身はどれも同程度の難易度であると認識しており、得意・不得意の分野の個人差が大きいことがうかがえる。

(8) 会話の練習は必ずしもネイティブスピーカーと行なうべきとは考えておらず、学習そのものも必ず韓国にある教育機関で行なうべきとは考えていない。

(9) 人前で韓国語を話すとき恥ずかしくなったり緊張したりするが、韓国語を使う機会があれば積極的に参加したいとも思っている。

(10) 旅行などで韓国に行き行って学んだ韓国語を使ってみたいと考えている。

以上、熊本県立大学の韓国語学習者を対象にした学習ビリーフに関する調査の結果を述べた。本調査で明らかになった学生の学習ビリーフをもとに授業作り(例えば、これまでよりも頻繁に反復練習や小テストを導入し、韓国文化に関する題材を多く使用するなど)をすれば韓国語学習がすべてうまく行くとは言えないが、参考材料として念頭に置きシラバスの作成や授業計画などを考えることはできるだろう。また、得られた結果を授業内での活動および授業外での個別指導(オフィスアワーなどを利用)を通して学生にも紹介し、学生が自分自身の学習ビリーフについて内省し、効果的な韓国語学習のために活用してもらうことも考えられる。

加えて、本調査の結果はあくまで全体的な傾向であり、個々の学生のビリーフを示すものではない。授業に参加しているすべての学生が同様のビリーフを持っているわけではなく、個人によって異なる学習ビリーフが存在する。例えば、調査項目22の「韓国語学習で優先すべきは、文法規則をできるだけ覚えることである」において、2割近くの学生は否定的に捉えており、その学生たちを相手に文法中心の授業を行なえば、韓国語学習がうまく進まないこともある。調査項目41の「韓国のドラマや映画、K-POPなどに興味を持っている」においても、2割以上の学生は否定的であり、そういう学生は授業中に韓国のドラマやK-POPなどの話題が出ることや関連教材を使うことを嫌っているかもしれない。教師は、このような個々の学生のビリーフを把握・理解し、授業時間外の活動や個別対応などの指導を通して、学生の学習意欲を促進させ、韓国語学習を成功に導くことが重要ではないだろうか<sup>29</sup>。

29 すでに述べたが本稿の調査は記名式であり、全員ではないが学生一人ずつに対してインタビューを行ない、個々の学習ビリーフについても確認した。そこで得られた知見は今後の指導に活かしたいと考える。

最後に、今後の課題について述べる。今回の調査は筆者の担当する韓国語授業の履修者に限定されているが、今後は、筆者以外の教師による韓国語授業の学習者も合わせて同様の調査を行なう必要がある。そうすれば、多数の学習者の現状を把握することが可能となり、(熊本県立大学の)韓国語学習者の学習ビリーフを究明することができる。さらに、調査対象者の人数が多ければ、学習ビリーフと学習歴との関連だけでなく学習ビリーフと学業成績との関連などについても傾向を明らかにすることができる。本稿では前者の学習ビリーフと学習歴との関連について試みたが、すでに述べたとおり、ほとんど差がない結果となった。調査対象者の人数が少ない場合、個人のばらつきなどが結果に影響するため、一般論としての結果や傾向を導き出すことは困難である。今後は人数を増やして調査を行ない、ビリーフと学習歴および成績との関係についても研究・考察したい。

#### 【付記】

本調査にご協力いただいた熊本県立大学の「韓国語入門 B-a」「韓国語発展 I」の履修者のみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

#### 【参考文献】

- 阿部新 (2013) 「スペイン・マドリードの日本語学習者の言語学習ビリーフの経済言語学的解釈—大学生・大学語学センターの学生・公立語学学校の学生の比較—」『明海日本語』第 18 号増刊, 159-178.
- 糸井江美 (2003) 「英語学習に関する学生のビリーフ」『文学部紀要』16(2), 文教大学, 85-100.
- 稲葉みどり (2014) 「外国語学習のビリーフの考察—愛知教育大学の 1 年生の場合—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』4, 149-156.
- \_\_\_\_\_ (2015) 「小中学校教師の外国語学習のビリーフの特徴—教師間、及び、大学生との比較—」『愛知教育大学研究報告・人文・社会科学編』64, 19-27.
- 片桐準二 (2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Beliefs—フィリピン大学日本語受講生調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 1 号, 86-101.
- 齊藤良子 (2009) 「日本人韓国語学習者の韓国語学習に対する好意が学習ビリーフと学習ストラテジーに与える影響について」『동북아문화연구 (東北亜文化研究)』18, 405-422
- 坂井美佐 (1997) 「言語学習についての中国人学習者の BELIEFS 上海復旦大学のアン

- ケート調査より」『日本語教育論集』12号,筑波大学留学生センター,63-88.
- \_\_\_\_\_ (2000)「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について—香港4大学のアンケート調査から」『日本語教育』104号,69-78.
- 佐藤敏子 (2006)「学習信条と学習効果—BALLIを使用した調査—」『つくば国際大学研究紀要』12,1-16.
- 高崎三千代 (2006)「フィリピン・マニラ首都圏の大学における日本語学習者のピリーフ—歴史的・社会的背景の視点からの考察—」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号,65-80.
- 中山誠一 (2010)「言語学習に対する学習者のピリーフと大学英語教育への期待—BALLI調査を中心として—」『国際文化研究所紀要』15,城西大学国際文化研究所,13-24.
- 和田衣世 (2007)「スリランカの大学生の言語学習ピリーフから日本語教育の改善を考える」『国際交流基金日本語教育紀要』第3号,13-28.
- Horwitz, E. K. (1987). "Surveying Student Beliefs about Language Learning." In A. Wenden & J. Rubin (eds). *Learner Strategies in Language Learning*. 119-129. London: Prentice-Hall.
- Yang, N. (1999). "The relationship between EFL learner's beliefs and strategy use." *System*, 27, 515-535.